

母校の創立百周年を 迎えるにあたって

広島県立庄原格致高等学校
同窓会長 寺川俊昭



明治三十年（一八九七）、校祖といふべき小田源吉先生が「格致知」を教育の理念としてかけ、庄原の地に格致学院を創立されました。この格致学院を前身とするわが庄原格致高校は、来年に創立百周年を迎えます。二十世紀とともに歩いた長い歴史の中で、本校もいくたの変遷をへて現在に至りましたが、その間に実に一万四千人の卒業生を、社会に送り出しています。その同窓生の皆様には、地元の県北の地はいうまでもなく、首都東京にも多くの方がたが飛躍せられ、各界でご活躍なさっておられることであり、まことに心強く、またご同慶の至りです。

同窓会の活動につきましても、近年ほどなく創立百周年を迎えるのといま、その活性化が強く叫ばれてまいりました。それをうけて、平成七年三月には昭和二四・二五・二六・二七年度の卒業生の中から幹事団が結成され、その尽力によって庄原グランドホテルを会場にして、実に二百人を超える参加者を得まして、盛大な総会が開かれました。同窓会結成以来の初めての盛事であり、お互いに県北の地における格致高校卒業生の活躍を、改めて実感しあつた

ことでした。

今年二月には、同じように昭和二八・二九・三十・三一年度卒業生の幹事団のご尽力のもとに、第九十八回総会を庄原グランドホテルで開きました。庄原市長八谷氏、東京格致会会長平田氏ははじめ三百人に近い会員の出席をいただきました。さらに東京女子医科大学・宮永嘉隆氏（昭和二八年卒）のまことに啓発的な記念講演もありまして、大変に意義深い、そして盛大な総会を催すことができました。

その間、来年の十一月初めに予定されている創立百周年の記念行事についても、鋭意検討が進められております。当日の記念行事につきましても、学校を中心に検討し企画が進められていますが、同窓会もPTAと協力して実行委員会を作り、いくつかの記念事業を計画し、進めております。

第一は、同窓会会員名簿の刊行です。これは口和分校・高野山分校の分も併せて、すでに刊行しました。

第二は、格致高校百年記念誌の刊行です。これは実行委員会の記念誌編集担当のところで、鋭意執筆・編集の仕事が進められています。

第三は、主たる記念事業です。これについては、学校の要望を基本にすることに、(一)校舎の中庭を生徒の憩いの場に整備、(二)既存の同窓会館を全面的にリフレッシュし、生徒の購読活動、クラブ活動の場として新生、の二つを、記念事業実行委員会の総会で決定し、その実現に同窓会・PTAをあげて取り組むことといたしました。

記念事業費の総額は、七、二四〇万円となります。内訳は改めてご連絡申し上げます。内訳は改めましてご連絡申し上げます。しかし、母校のさらなる発展のため、同窓会としては大きな希望をもつて、その実現に邁進しようではないかと、強い決意の表明をいたしております。実行委員会も、その決意を固めております。

東京格致会におかれましても、何年同窓会はこの記念事業への取り組みを十分にご理解賜りまして、積極的なご協力を賜わ

りますよう、心からお願い申し上げます。 (前大谷大学学長・昭和20年卒)

●平成七年度「東京格致会総会・懇親会」報告



十月二十一日(土)午後三時、丸の内(山水楼)に母校から世良英成校長と寺川俊昭同窓会長をお迎えして盛大に開催された。参加した地元同窓は四〇名。校長と会長から力強い近況報告と抱負を聞いて元氣いっぱい、母校創立百年に向けてのさらなる結束を誓った。

庄実の滑支部長、山水楼社長からユニークな祝詞もいただき大いに湧いた。宴が終っても別れがたく、同期が相語らって第二次会に散つていたのは恒例のとおり。今年も多数の参加で大いに盛り上げた。

記念写真のお名前は次のとおり(敬称略・左から右へ)。

- 〈一列〉明賀・坂井・室伏・金森・兼利・山口・田辺(庄実)・森沢・須沢。
- 〈二列〉京本・藤原・田部・永井・世良校長・寺川会長・滑(庄実)・平田・梅木。
- 〈三・四・五列〉五十嵐・足立・西谷・松島・山田・渡辺・松田・小山・近藤・木村・本田・友広・飛谷・山根・滑・沼越・田辺・酒井・加藤・藤高・桑原。

〔随筆〕

鮎の思い出

三玉富之助

初夏の訪れとともに、また鮎の季節がやってくる。そして、あのほろ苦い鮎の内臓をかみしめると、私はいつも、母のことを思い出さずにはいられない。

昭和十八年の秋、私は大学に進んだが、あの学徒動員で、多くの学友はペンを銃に替え、そのまま出陣していった。その時私は、年齢の関係からそのまま一年間大学に残ったが、翌一九九年、私もいよいよ軍服に服することとなった。陸軍からは、新設の特別幹部候補生に採用の旨通知があったが、難関の海軍主計短期現役の試験にも合格していたので、重い物を背負って行軍することが難手の私としては、当然のごとく、海軍に行くつもりであった。

そのことについて、父は何も言わなかったが、母は私と二人だけになったとき、洗濯ものをたたみながら、まるでひとり言のように「陸軍にせんかね。陸軍じゃつたら隠れるところもあるが、海軍で軍艦が沈んだら、どうにもならんが……」とつぶやいた。

その言葉で、もちろん、私の決心が変るはずはなかったが、母にしてみれば、すでにノモンハン事変で長兄が戦死していただけに、人に言えない内心の吐露であったに違いない。

やがて出征の前夜、全員そろったわが家の食卓には、母の心づくしの手料理が並べられている。よく見ると、私の真前に、立派な姿の「鮎」の塩焼きがある。当時まだ本当の味がわからず、とくに好物でもないのに……と思っていると、同席の叔母が「富ちゃん、鮎はのう、山奥の川で生まれて、一度海に出て、また必ず生まれた川に戻ってくる魚じゃけ。富ちゃんも鮎に

あやかるといって、お母さん、み苦労して探してきちゃったんよ。しつかり食べて、必ず戻って来んさいよ」と言った。

ふかく、西城川が流れ、元来、鮎の多い地方である。しかし、当時は、鮎など取る環境ではなく、しかも時期はずれで、母は、手に入れるのに随分苦労したらしい。私には、あの鮎の内臓のほろ苦さが、一入り身にしみた。

それから六カ月、私は築地の海軍経理学校で猛訓練を受け主計科士官となって横須賀海軍経理部に赴任した。一応、艦隊勤務を希望したが、幸か不幸か、任地は陸上で訓練の時以外は、遂に艦に乗ることはなかった。それでも、連日の空襲で多くの戦友を喪い、随分危い目にもあったが、無事、復員し復学することができた。

あの時の鮎の効き目があったのかどうか、私にはわからない。でも、鮎に込められた母の思いが、私をふるりに連れ戻してくれたのだ……と、私は今でも固く信じて疑わない。

あれからもう五一年、その母も、今はもういない。九三歳で天寿を全うしたが、何の苦しみもなく、眠るように逝ったのが、私にとっては、せめてもの慰めである。

(昭和十七年卒)

台湾旅行の思い出と格物致知の考察

石田虎夫

私は、県立移管により県立格致中学校と改称された、昭和十三年四月に入学した者の一人ですが、東京格致会のおおいたの皆様とは年齢差はありましても、格致の同窓ということで深い誼みを感じております。

明治三〇年に私塾「格致学院」が創立されてより来年は一〇〇年という記念すべき年を迎えることになっていますが、東京格

致会会報第二号の「母校だより」の扉も触れられていましたように、母校の格致が建学以来「格物致知」「質実剛健」をモットーに今日まで脈々と続いていくことを聞くと、つけ懐かしい思いがして感慨深いものがあります。

私が、一〇年ぐら前に台湾旅行した際、母校と同名「格致中学」が台湾にも存在することを目あたりにし、中国古典の源流を一つにすることへの大きな感動と強い郷愁の念を覚えたことがあります。

それは桃園の国際空港到着後、専用バスで高速道路を台北市内に向け走行中、車窓より四階建の校舎の壁面に表示された「格致中学」の金文字が偶然にも目に映り驚きも一入で、しばらくの間それを見送っている程でした。

続いて台湾滞在中古都であった台南の孔子廟を訪れた時のことです。案内して下さった台湾人の黄さんから「孔子の政治哲学には格物・致知・誠実・正心・修身・齊家・治国・平天下の八つがあり、その格物致知とは事物の道理を追求し、知識を得ることである」と、説明されたのがまだ昨日のことのように思われます。

その「格物致知」の出典が中国史書の「大学」であることは知っていても、それ以外殆んど知識がなかったので辞書などで調べてみたこともありました。

その大学八条目といわれる「致知在格物、物格而后知至」の古典文中にある「格物」について、朱子学では、「物にいたる」と読み、個々の事物の理を究明してその極に至ろうとする窮理としています。陽明学では、「物をただす」と読み、その意志によりなすこと自体が物、格は正で、不正を正すこと即ち、対象に向って心の働きを正しく發揮することとしています。また、「格物致知」についても朱子学では格物において自己の知識をその極まで推し究めることとし、陽明学では、格物において自己の良知を錬磨發揮することとしています。この

ように主体の陶冶方法としての概念に双方大きな隔たりがあることが窺えます。それで格致学院は果して何れの学派であったであろうかという疑問を持ち続けてきておりました。

ところが、昨年の春に帰省して偶々庄原田園文化センターを訪れ、倉田百三文学館を見学したことによりその疑問を解明することができました。

それは、館内に展示されていた倉田百三の「幼なきころ」の文中に次のような内容で書かれていたからです。

「庄原は、広島県内で文化が高く私達は小学校で英語をやり、近藤先生の漢学塾格致学院という陽明学派の塾があり、綾目女塾という女子の塾もあった。学芸の気風が流れていた姉たちは綾目女塾に通った。幼ないころの神秘的冒険となつかしい思い出に、残るのは西城川だ。これは中国一の大河郷ノ川の主流にあたり伯耆境から源を發し北備後をめぐり流れている」

これをもちまして終らせて頂きますが、最後に皆様のご健闘と東京格致会の今後のご発展を祈念致します。(昭和十八年卒)

谷口勝利先生のこと

〈顧問〉 塚本幸三

格致中学校時代からの友人、渡辺健さんからある時こんな手紙が届いた。

二月二十一日、谷口先生より「右コピーによる」お便りを頂戴いたしました。

塚本幸三君が「谷口先生の授業が一番印象に残りなつかしい」と便りして参りました——と便りを書きましたので。一筆連絡まで。

「右コピー」とは、谷口先生からの筆で書かれたハガキのコピーで、それは次のような文面でした。

お礼の言上が遅くなりましたが、……(省略)……去る二月八日に比和町内



谷口先生ご自身の揮毫になる歌碑

外の有志の方々が、私の叙勲の祝賀会を開いて下さいましたので、その席上塚本幸三さんが、私の授業をおぼえていて下さるというあなたのお手紙の文面を私の謝辞の中に引用させて頂いて貰いました。……云々。

渡辺健さんは、旧姓伊藤。中学時代からの親友で、「けんさん」「けんさん」と呼ばれて、友人から大変慕われている。現在は広島市段原近くに住み、生れは先生と同郷の比和の出身。現在郷土史「自昌院物語」など執筆中。

それは、今から五十余年も前の、私が中学三年の時のことだったと思う。私が谷口先生が格致に着任なさって初めて先生から国語の授業を受けた日のことだった。当日は生憎曇天だったように思う。うす暗い教室の黒板に白いチョークで書かれた

●訃報●

市岡四象・副会長（昭和25年卒）
七月五日、蜘蛛膜下出血のため急逝されました。細川会長体制のとき副会長の一人として就任され、東京女子医大教授という要職にありながら東京格致会運営のため多大なご尽力を頂きました。まことに痛恨の極みです。謹んで会員各位にご報告するとともに、ここに心よりご冥福をお祈りいたします。 合掌

「たり」という最初の先生の文字が、妙に、その輪郭さえもはつきりと、今もなお私の脳裡にくっきりと強く残っているのだ。四角つばい文字、それでいてゴツゴツの字でない、なにかやさしさを感じる、大変わかりやすい文字だった。

文字を書かれる先生のチョークの握り方にも、また先生流の一つのスタイルがあった——親指・人差指・中指の三本に薬指を軽く添えて、チョークの先の方を持ち、小指はピンと上にはね、黒板の面を上下・左右に動いていく。私は今でも、その当時の様子を思い浮かべることができる。

その時の国語の授業の内容がどんなものであったか、今はもう憶えていないが、当時の国語は現代の国語とは違って、現代文で書かれた文章ではなく、所謂、擬古文風な表現の文章ばかりだったと思う。

そこには、「なり」「たり」というようなことが常に出て来る。そのひとつひとつの単語を取り上げ、それらをきちんと先ず説明した上で、全文の解説へ——これは当時の格致の授業では殆んど見られなかったし、また大変わかりやすい教え方だと私は大層感心したものだ。

その「たり」についての説明は、こんなものであったのだろうか。「たり」というのは空手の助動詞と言っている。現代語では……テイル……テアルと言いう意で……と。

とにかく、この「たり」という文字が妙にくっきりと印象強く今も私の脳裡に残っているのだ。また先生は、その身なりもきちんとおられた。お洒落とまでは言わないが、身だしなみのいい、魅力的な着こなしだった。後日伺ったところによると、前任校が女学校（神戸県立第三女学校）だったことにもよるだろうが、

「口角沫を飛ばすか」とは、はげしく議論するときに言うことばだが、先生は授業に熱が入ると、口角唾をためる。左の口

角がややつりぎみに開き、白い唾をためながら講義が熱を帯びてくるのだ。このように、不思議といろいろなことを本当によく憶えている。それほど先生の授業が若い私にとって印象的だったのだと言えようか。

その後、私は広島高等師範学校の国文科に入学し、先生と同じ道を歩むことになり、神奈川の高等学校の国語教師を務める身となったのだが、実のところ、当時私は決して国語を得意科目としていなかった。むしろ、数学、英語、それに剣道など体育方面の科目を得意としていた。だのになぜ国文科に？

今考えてみると、先生から受けたあの強い印象が、私を国文学の世界に引き入れてしまったのだろうと思うようになった。もし、このお話を先生の奥様の耳に入れたら、先生のおそばで、「それは、あなた、教師冥利に尽きますね」と言っていて、やさしくほほえまれる奥様のお顔が目につくでしょう。

つい先日、谷口先生にお電話をしたところ大変お元気そうでした。今年八十二才におなりになる由、それにしても大層若々しいお声で、「このところ、少し背中が丸くなりましてね……」と。

先生のこの元気の秘訣は一体どこにあるのだろうか。先生は今も「創世短歌会」の撰者として、今なお現役として短歌の指導に活躍しておられる。そこに元気の秘訣がおりになるのだと私は思います。

昨年の暮れには、多くの弟子たちの手によって、吾妻山山頂に立派な先生の歌碑が建立されました。私も大変うれしく、今年の夏にも機会があれば、ぜひ、先生と並んで碑前で記念写真を撮りたいものだ、それを楽しみにしています。

「借老同穴」——いつまでも奥様ともどもお二人、仲睦じくご壮健でお過ごし下さいませよう、心からお祈り申し上げております。（昭和19年卒）

「格致人脈」

椿 喜久夫



昨年六月社長を後進に譲り、約四〇年ぶりに故郷庄原に帰って来た。ここ一〇年ばかりは月に一度、大阪から家の風通しと田舎の感覚に慣れる為のトレーニングを積んだ上、生活の根拠を思い切って移した訳である。一昨年の初め、広島県教委の課長が大阪の私共の会社を訪ねて来られ、格致高校の第二グラウンドを戸郷川の辺りに新たに造りたいので土地の買収に応じてくれとの話があった。序の事に学校の近況も話して頂き、私も格致中学から格致高校での思い出を話し、快く買収に応じる旨伝えた。

私の「格致」との因縁は他の同窓生の方とはかなり趣きを異にしており、正に出た日這入ったりまた出たりで、年数にして約九年間の関わりであった。その第一は中学四年で予科練大量志願者の一人として中途退学した事である。そしてその第二は二年後終戦により無事復員し復学したものの、復員者全員二ヶ月で退学させられた事である。さらに三回目は大進進学を志し新制高校三年に編入させて頂いた事である。

こうして書くとはほど手に負えぬ「ボンクラ」だったなと想像される方もおありと思うが必ずしもそうではなく、我が儘一杯に勉強に遊びにと私にとって最も多感な時代を快く付き合ってくれた母校が「格致」なのである。従って去る二月二十四日庄原で開かれた同窓会には四十七年ぶりに出席

させて頂いたが、人一倍感慨一入のものがあつたといえる。またその際東京格致会の平田会長にも大学同窓として卒業以来初めて会い、かつての東京格致会での事を思い起した訳である。

それは昭和三〇年代防衛庁建設本部の一技官として東京在住の頃、同級生の吉光君（後藤弁護士）、田中君（出版社）コンビに声をかけられ会員の末席を汚した時期もあり、総会では小さくなっていった私も総会后同級生だけの二次会では格致時代の思い出を酒の肴に大いに痛飲した事など次から次へと脳裏をかすめてゆく。

その後私自身防衛庁から日本道路公団に出向して第三京浜道路の建設に参画し、四十一年九州縦貫道建設の先駆けとして熊本に出て行くまでの七八年間、東京格致会なかならず前記二名の同級生には随分とお世話になったものである。しかし今ではこの両名とも幽明境を異にしてしまった。誠に残念でならない。

そして今一つ、二十二年間の公団在職中特筆すべき「格致人脈」のあつた事に触れておきたい。それは中に這入って判った事であるが、全国的組織であり技術者集団である道路公団の中に「格致」の関係者が何れも土木屋として四名いた事であり、あの草深い田舎の中学高校出身者の中に四名も志を同じくする者がいたのにはいささか驚いた。

一番の先輩は建設省から来られた十八年卒の土肥正彦氏である。公団内の土木技術者総てが土質工学の権威者としての氏の指導に預り、そして退職後もコンサルタントの社長として東南アジア諸国の技術的指導に当られ、私達後輩としても常に誇りに思っていた方である。

そして年次的には次が私であるが、私の事は後に譲るとして三人目は二十六年卒の玉川清君である。ちょうど私が九州から本社の課長で帰って来た頃、彼は中央道の東洋一の規模を誇る恵那山トンネルの工事長

として断層と湧水に阻まれ渾身で進まぬ難工事に取組んでいた。しかしそれも彼等の衆知の結集で見事克服しやがて開通の運びとなりその功績により「天皇賜盃」を頂くという栄誉に浴したのである。私も担当課長として、また同窓として共に喜びを分かち合った事は勿論である。

そしてもう一人、格致入学後父親の転動に伴い他県に転校した石井滋君がいた。たまたま私と大学の卒業年次が二十八年と同じであり、本社の課長時代席を同じくした関係上、時にはライバルとしてまた時には相談相手として共に切磋琢磨し、さらにはついこの前まで私は大阪の、彼は広島道路メンテ会社の社長として高速道路の管理に携ってきた仲である。

私もこうした同窓あるいは数多くの方々のご指導をうけ昭和五十六年金沢管理局長として北陸の地を踏んだが、サバイバル競争の激しいこの社会で私自身思ひもよげぬ栄進であり、この時ほど心底「古きよき時代」に格致で学ばして頂き、「予科練で根性を鍛えて頂き」「大学で専門的知識を与えて頂いた」その事に対し感謝の念を感じた事はなかつた。そして四人の同窓それぞれが高速道路の建設という一つの大きな絆で結ばれ、それぞれが全国各地に数多くの記念すべき遺産を残すことができた事は「技術者冥利」につぎる事であり、それを共有した我々は只の偶然の出会ひとは思えない何かを感じずにはいられないのである。

しかし時は経ち土肥先輩はすでに鬼籍に入られ、残った我々も古稀に近づいている二十一世紀を前にして、今からは若い人達の時代である事を痛切に感ずる今日この頃、母校「格致」と「東京格致会」の益々の隆盛をお祈りして筆をおく。

（大阪道路メンテナンズ(株)取締役相談役・東亜道路工業(株)監査役・昭和二十年卒）

自分史を重ねて

渡辺武臣



この歳になって急に格致同窓会が近いものになりました。本部同窓会長に寺川氏、東京格致会長に平田氏の登場です。いずれも昭和二十年春卒業の同期です。五十歳を過ぎる頃となりますと、そろそろ「昔」が恋しくなり、また振り返る余裕も出てきます。二十年春の四年卒組百五十余名のうち、十二名が現在関東近辺に住いしておられますが、私達も十年近く前当たりから集まりを持ち始めました。ちょうど昭和二十年が干支で酉年にあたるのとかで、酉年の卒業なら「格致会」だと（八谷義登氏命名）年に一、二回酔って旧交を温めあう会を持つております。

広島弁、「ふる里」の味は好いものです、心とみます。

さて、私は昭和十六年に旧制格致中学に入り、戦時色も濃く、私達の学年から戦闘帽、いつでも背のうらに転用できるランドセル型の鞆にゲートルという格好での登校です。入学式当日であったでしょうが、生徒通門を入って正面の掲示板に墨書された撤文が貼られたおりました。内容はよく解らないなりに違ふ世界に入ろうとしているな、と興奮したものでした。

第六高等学校在学先輩達の（その一人は前東京格致会会長の細川氏）、「後輩に告ぐ」励ましの言葉でありました。以後四年

間、呉海軍工廠長郷寮での卒業式（卒業式のない同期生も多数いる）までいろいろありましたが、言うなれば大日本帝国憲法史の終末期、日本の暴走期と一致する中学生生活でした。

十六年末には日米開戦、十七年には食糧管理制度発足……やがて農家に寝泊りして暗渠排水作業、そして遂には勉強もやめ通年動員の形で、人間魚雷「回天」の製造に従事……あれこれお話ししたいこと、想い出は尽きなくありますがここでは点描にとどめます。

私は、同じく同窓生なのですが母校の教壇に立つ六年半がありますので、話をそちらに移すことに致します。

昭和二十五年、恩師松島雅美先生から声をかけていただき、社会科教師としてお世話になる生活が始まりました。終戦直後の学生生活（広島高師）でもあり、知識・経験の足りない「青い」教師であったこと、今もって申しわけない気持ちがあります。六年半の間にもいろいろありました。

さっそく二十五年末、格致史に残る出来事と出会います。格致校舎の焼失です。宿直をなさっていた谷口先生の傷心のお姿も忘れられませんが、作法室から一度に二枚の畳をかつぎ出した女子生徒の勇姿も思い出されます。以後講堂を仕切つての授業（隣り同士教師の声はいつも重なり合っていた）、やがて東校舎（旧庄原実業）に合同しての生活、田中茂樹君がポストンマラソンに優勝して田中君の家まで旗行列をしたらこともありました。若い教師たちの各種ミーティングも心に残ります——テニス、剣道、クリスマスパーティー（女生徒も混じっていた）。

学級経営にも力が入りました。学級経営は、授業と並ぶ教師の二大職務と言って良いのですが、昭和二十六年、無着成恭さんの「山びこ学校」が出版され大いに刺激されたものでした。当然、文集も作りました。川柳会もやりました（ステッキハ八谷

先生〆を見れば右を通りけり」(禿鷹へ渡辺)や、空からわれらを眺みけり)。クラスの歌をつくろうと皆で作詞、投票で選んだものに井上一清君(当時東京芸大在学中)に曲をつけてもらいクラスで斉唱(少々構えた感じなのでやはり回数少なかつたが)したりもしました。

自分史になってしまっていますが、格致(當時は庄原高校)を離れて以後にも少しふれたと思います。

妙な縁(結婚話)で三十一年九月から横浜に住むことになりました。三年生の一学期で学級を放り出す結果になり、クラスの皆さん、そしてあとの面倒をみて下さった国原先生にも、今なお申しわけない気持ちであります。勿論一面では、京浜地区に出ている卒業生、またその後上京して来た皆さんとも親しくお会いできるといふ、有難く嬉しい経験も重ねさせていただきました。「教師冥利」を格致と関わって味あわせていただいているわけです。

少し「教育」のことにふれます。人を教える、いや人と共に育ち成長する営みは、国家百年の計どころか日本民族、いや人類にとって未来永劫の課題です。ところが最近「教育」がなかなか機能しなくなりつつあります。子どもが教師の言うことを聞かなくなりました(良い時代を生徒として育ち、また教師として働いたと感謝しています)。親も世間も学校ばかりを責め続けます。「いじめ」「不登校」、時に「暴力」……、きりがありません。「まじめ」は崩壊寸前だ、という人もいます。「体罰」に代わるものは何なのか、等々気になる課題がまさに山積です。老骨にむちうつてもう少しの間「教育」と関わりたいと思います。最後に、母校が百年を迎えます。周年行事をどんな形で行うか、ご苦労が続くと思われませんが、「誕生」を祝うのは一人ひとりも同じこと、「生まれて来た」ことが納得でき、「今から」に何を意欲するかというところであります。とすると学校の場

合は、「建学の精神を想起し、新たなる視点に立ってこれを再構築する」となるのでしょうか。今をどう評価し、どのような視点を確認し合うか、関係の皆様のご努力を期待して終わりとします。(神奈川大学短期大学教授・昭和20年卒)

〔随想〕 オーストラリア片想い

坂井昌彦

(一)
いま、どこの国に住みたいかと聞かれると、ためらうことなくオーストラリアをあげるだろう。なぜかと問われると確たる根拠を示せないが、あまり国籍度を自覚させない開放的な空気がよいのか、わたしのよくなアバウトな極楽トンボと波長が合いそうな国に思えるのである。

人気(じんき)が思いっきり素材で笑顔がよい。食べ物が安い。ビールとワインがすこぶる旨い。そして大好きな魚はいくらでも釣れる。これ以上注文ついたら罰がある。この国を初めて訪れたのは一九七五年の暮れ。全豪オープン・テニスと日豪テニスの取材で、オーストラリア・カンタス航空と提携したアゴ・アシツキの結構な旅だったが、当時は米ドルがまだ三六〇円の時代で、豪ドルはさらに高く四〇〇円。一カ月の長丁場をとほしい外貨(二〇〇〇ドル)を懐に各地を転戦した。ネガティブな先入観は植えつけられていた。――流刑囚の子孫の国だから人間はデリカシーに欠け、白豪主義のしつぽをいまだに引きずって東洋人を嫌う。連中には味藪がないから食い物はおそろしくまずいぞと、さんざつばら脅かされた。しかし、そこは生まれつき物事はすべて自分に都合のよいほうに解釈できるとてもよい性格の持ち主だから、なかに、ビールさえ旨ければなんとかなるさ、ときわめて、ハーズとい

うか、いい加減にこの新大陸に溶け込むことができた。きれいなプラモデルのようなキャンペラは別にして、シドニーは近代的高層ビルが林立し、どちらかといえばアメリカ風、開放的で活動的、はなやかでにぎやか。それに対してメルボルンのほうは万事イギリス風、クラシックで重厚、物静かなたたずまいである。

この二つの都市は、江戸と上方、モスクワとレニングラードと同様に抜き難い対抗意識があるそうだ。シドニーにはメルボルンの伝統・保守・形式主義が鼻もちならず、メルボルンにはシドニーの新しがり、無節操・軽薄さがどうにも気に入らないらしい。

ま、これは「天動説と地動説」のような断絶ではなく、「観念と様式」の誤差というか、歴史のスタートラインのちよつとしたズレから生じた感覚上の行き違いで、お互いけつこう面白がつて相手をけなして楽しんでるフシもある。

わたしは、オージー(オーストラリア)の氣質がたいへん気に入っている。イギリス人の几帳面さにアメリカ人の陽気さをプラスし、それに新大陸人として生まれた素朴な鷹揚さが加わっている。時おり見せるジョンブルの末裔らしい豪胆さも好ましいし、ちよつとした気取りもまたご愛嬌である。

かれらは、アジアで生きて行くべきアジアの一員としての自覚を十分にもっている。経済的には脱欧入亜の姿勢で、伝統的なイギリス指向を意識的に修正した政策をとっているものの、そこはアメリカと違ってイギリスとの断絶は一度も経験せず、心情的にはイギリスを「本国」とみなす意識は現在でも連綿として続いているのではなからうか。

文化的にも完全にイギリスの「分家」で、伝統スポーツのクリケット(野球を面白くなくしたような球技)は、いまでもの

観客を動員するし、コクニー(日曜日をサングアイと発音するようなロンドンの下町訛り)が標準語(?)として幅をきかしている。

(2)

「どうだい、このビールは?」

「すこく旨い。日本とおんなじだ」

かれらは、自分の州のビールがご自慢なのだ。褒めると子供のように無邪気に喜ぶ。シドニー(ニュー・サウス・ウェルズ州)は「トゥーイーズ」、メルボルン(ビクトリア州)は「フォスターズ」、プリズベーン(クインズランド州)は「フォーエックス」、アデレード(サウス・オーストラリア州)は「クーパーズ」、そしてパース(ウェスト・オーストラリア州)が「スワン」といった按配で、それぞれの州がほん

とに旨いビールをもっているのである。昼間から開いているパブ(街角いたるところにある立ち飲み居酒屋)に入ると、たちまち五、六人のオージーに取り囲まれて、おごりのビールと質問の一斉射撃の的となる。そして一時間もたてば「ダースほどのマイト(親友)ができてしまう調子のよい国だ。これが病みつきにならなければ男ではない。

不思議なことに英語は下手くそなはずなのに、どうした訳か、家族・商売・国際情勢・スポーツ・ギャンブル・オンナ……: 会話がきわめて流暢に進展して盛り上がったいくのである。そして二次会、三次会だ。なぜそうなるのか、ひよつとしてオレはホントは英語がうまかつたんだ! 翌朝、二日酔いの頭でいくらか考えてみても藪の中である。

飲んべの心得として、どこのレストランにも酒が置いてあるわけではないから、「ライセンスド(酒類販売免許)」の表示に目を光らせること。抜け道はある。酒を置いてなくとも必ず近所に酒屋があつて、そこで仕入れて持ち込めばよい。日本みたいに「持ち込み料」をぶつたくるような性格の悪い店はない。

二度目のオーストラリアは、一九八六年四月のハレー彗星見物に内陸部の砂漠の真ん中のバーストへ。三度目、四度目は九〇年代に入ってから、ブリスベーン南一〇〇キロの田舎町パームビーチにある友人宅を借りて、のんびり無為徒食した。

日本の家を売り払って購入したこの家は、海べりの高層マンションの一フロアの五分の一の面積を占め、二寝室・二浴室。広いリビングに収納室、洗濯室、それにカギの手のペランダ。室内プール・サウナ・テニスコートが鍵一個で自由に使える。日本というなら、さしずめ「億ション」級だが、これがさして裕福でもない友人の所有物となっている。

家人と二人で自炊し、釣りをし、テニスをやり、山を歩き、ぼんやり海を眺めて、来し方行く末をのんびり考えたりした。「ゆたかさ」とは何だろう。日本の「衣・食・住」とオーストラリアの「住・食・衣」はまさに対照的であり、人間生活の必要順位が逆転している。円高のせいだけでなく物価が劇安だから、財布の豪ドルがちっとも減らない。金持ち国日本の市民生活の貧しさを思い知らされる。

ここには「時間」もたっぷりある。自分を見つめ直すのに十分である。急いでいる人はだれも居ない。バスに乗る。下手な英語で行き先を確かめる、料金を尋ねる、降りるところで合図してくれ……。後ろにつづく乗客を気にしない、もたもたやっているのだが、運転手をはじめ誰ひとり非難がましい顔をする人はいない。それほどろか、みんなニコニコ好奇心いっぱい表情で、ことの成り行きを楽しんでいるふうにも見える。

スーパードでもパブでも、すぐに地元のおっさんにつかまる。大声早口のオージー英語には往生するが、「この町は気に入ったか？ いままでおるんか？ ○○へ行ってみたか？……」といった具合で、すぐさまマイト(友だち)になる。こんな按配だか

ら家人もたちまち親豪派とか 孤独な年金生活の逃げ場ではなく、市民レベルでの文化交流などを通じて地元の仲間入りをさせてもらえるのなら、すぐにでも移住したいぐらいだ。

(3)

好きな魚の話のひとつ。オーストラリアの海は日本と比較にならないほど豊饒である。遠出しなくても家の下の浜で大型シロギス、ダート(マナガツオ類)、クロダイ(こちらは銀白色)などがいくらでも釣れる。餌はガンリンスタンドで簡単に手に入り、冷凍エビで十分だが、イソメ類を使えばそれこそ一魚の入れ食い。イワシを一匹掛けして遠投すれば、アジ科の高級魚(シマアジ・ブリ・カンパチ・ヒラマサの仲間)が岸から釣れるという信じがたいことも可能なのだ。

違った魚が食べたかったら町外れの魚屋(どういう訳か漁港からかなり離れた道端にポツンと建っている)に行く、それこそ選り取り見取り。まだ生きている鯛・鯉・

鱈・鱒・鱒(これは不味)、とびきりマッドクラブ(泥蟹)・車海老・芝海老・伊勢海老のボイルしたもの、うごめいてる海胆・蛤・赤貝・ムール貝である。日によっては活きのよい鮪を大きなブロックに切って「ボンレス・ツナ」と称して並べている。もともと物価が安いところへ円高の威力で信じられない値段だ。「きょうは手巻き鮪大会だぞ」と、大いに高揚して必要以上に買い込んで引き揚げることになる。

初渡豪のころは、目の前で揚げてくれる白身魚の大きなテンブラに、食塩とレモンだけを振りかけフウフウ吹きながら「幸せだなあ」と、無邪気に喜んだものだった。慣れてきて自分で釣ったりさばいたり、刺身や塩焼き、ワサビや醤油……とグレードが上昇してくると、もういけません。あっさりとして日本原住民に戻ってしまふ。

昔から不遜にも、どこへ行くとうと何を食おうと、ラフな神経とタフな胃袋で勝負だと気ままに旅してきたものだが、歳のせ

いか、あるいはヤギが回ったのか、異国でワサビや醤油の香りに出会うとうるたえて素直に生体反応をしてみよう。胃袋が忘れていた食の快楽・愉悅の記憶を取り戻してしまうと、このプロ旅行家から毅然たる態度が消え失せる。

ま、魂が肉体に下剋上されることは、よくあることだ。

オーストラリア人は味音痴だと悪口をいうやつもあり、たしかに料理が上手だとも思わない。しかし食材そのものはきわめて豊かであり、とくに海の幸は申し分ない。半可通は、オーストラリアの魚は美味でいけねえやとけなしたりするが、それこそ自分の味蕾の性能を疑うべきで、半端な調理などしないほうがずっと旨い。刺身で、塩焼きで、テンブラで、寄せ鍋で、一夜干しで食いまくってみたがハズレはない。

しかし、あの豊かな海の、あのおびただしい種類の魚を一通り味見するには、いったい何年かかることだろう。乗りかかった船だ、体を鍛えてセッセと通うしかないか。(副会長・昭和24年卒)

第14回東京格致会ゴルフコンペ



平成8年6月8日(土) 一の宮Cにて

平成八年六月八日(土)一の宮カントリー倶楽部の天候は薄曇り微風の好コンディションの中、当倶楽部のメンバーである酒井さんのご紹介で九時四五分、東コース一番からティオフ、十五名が熱戦のスタートをきりました。今回初参加して強く感じたことは、同窓である気安さ、多士済々の異業種の皆さんと、礼儀とルールは守りながらワイワイガヤガヤと楽しみながらプレイ出来る素晴らしい会である事を知りました。ペリア方式の為、誰が優勝するか予測は難しく、現に私なぞ買っている人は少なく、馬の当たりは友広氏只一人の当たりでしたが金額寄付の気前の良さは次回がやりにくくなりませんか。

私の組みは同級の住本・友広氏、そしてゲストメンバーの菅原さんと個性豊かな仲間恵まれて？ 午前は43の実力通り？ 午後は酒の飲み過ぎと、遊んだのが良かったのでしよう、上がった見れば優勝とニアピンを頂く幸運を勝ち得ました。コースは36ホールの

風光明媚で伸び伸びとプレイ出来ました。幹事の室伏さん酒井さん、そして気楽に迎えて下さった仲間の方々に感謝致します。次回は同じ場所十月二十六日(土)か十一月二日(土)頃を予定しております、成績を気にする人も、気にしない人も是非参加して下さいよう、芝の上でお会い出来る日を楽しみにしております。

入間市 川島一弘(昭和27年卒) 記

連絡先 〒338 浦和市西堀2-14-1
TEL ○四八-八六二-一五六九八 室伏孝一

- 1) 弘雄 二洲 敏
- 2) 川島 輝省 八洲 敏
- 3) 佐藤 村田 伏孝 一
- 4) 三原 本康 進
- 5) 菅住 森久 幸
- 6) 酒井 山弘 佳
- 7) 積明 近藤 正
- 8) 近藤 梅本 元
- 9) 友広 三郎 三
- 10) 三郎 三郎 三
- 11) 三郎 三郎 三
- 12) 三郎 三郎 三
- 13) 三郎 三郎 三
- 14) 三郎 三郎 三
- 15) 三郎 三郎 三

平成八年度総会の御案内

本年度東京格致会総会・懇親会を左記により開催致します。万障お繰合せの上、是非ご出席下さいますようご案内申し上げます。どうか旧友・知己をお誘い合わせて、多数ご参加下さいませようお願い致します。なお、準備の都合上、お手数ながら九月二〇日までに同封の葉書でご出欠をお知らせ下さいませようお願い致します。

平成八年八月

東京格致会 会長 平田耕司

一、期日 平成八年十月十九日(土)
午後三時より

二、場所 東京都港区芝公園二一五二〇
郵便貯金会館

(メルパルクTOKYO)

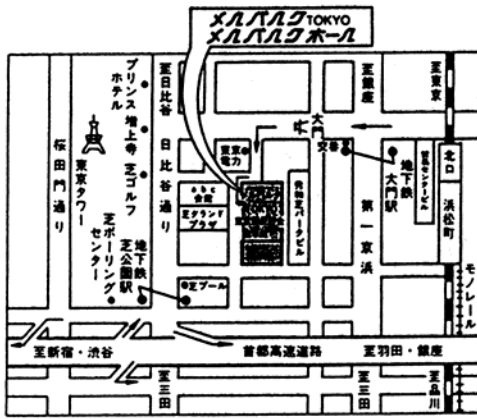
四階 白鳥の間

電話(〇三三三四三三三三)七二二〇

三、会費 総会費 八、〇〇〇円
年会費 二、〇〇〇円
学生会 三、〇〇〇円

郵便貯金会館

東京都港区芝公園2-5-20



幹事の拡大についてのお願

目下 東京格致会では各卒業年度から幹事を選出していただくように現幹事を通じたり、先輩にお願いするなどして幹事の拡大を進めています。

同窓会は、何といつても「同級生の集い」がベースになって発展するものだと思います。その同級生の集いでは、全員が青少年期にもどって和気あいあいの会話がはずんで楽しいひとときがもてることは、誰でも経験しているところですが、同窓会はその延長でもあって、私達は同級生の集いを年一回の東京格致会総会へつなげていきたいと思ふわけです。東京格致会は、古里を遠く離れて生活している私達が、ひとしく「格致」という学び舎で青春を送ったということから、常々古里や母校を偲び、そして年一度相集り先輩・後輩の中でお互いの健康を確認し、また励まし合うことができる誠にも難い存在です。そしてその会の維持発展を計るため「幹事」をお願いし、その幹事の中から常任幹事を選んで日常の会の執行をすすめています。

幹事は総会の他、年一度の全体会議(毎年二月)へ出席して会の基本事項(予算、年度計画の決定、年会費の決定などの重要事項)を協議、決定するなど会社という取締役的役割を担っていただきます。そうしたことから私達は、この東京格致会運営の柱となる「幹事」を各卒業年度から一名以上(二名でも三名でも可)お願いして会の発展のためにご助力賜わりたいと念願する次第です。その適任者がおられましたら現幹事(常任幹事を含む)が私までご連絡下さるようお願いいたします。

- 事務局長 友広 寿
勤務先 (株)ディグ
電話 〇三三三五五一三〇六〇
電話自宅 〇三三三九二三二四〇二五

基金「本会運営基金」の報告

基金については、会報第一号にも掲載しました「趣意書」の中に「無償の株主、一口一万円・締切り設けず」とありますが、会員の皆様へのPR不足も懸念しております。平成八年七月三十一日現在五十八名の方々(基金出資者のご芳名は後記)のご賛同を得まして、多数が集まっております。基金を拠出頂いた方々には感謝します。基金者としてはこれから情報を収集して適切なPRに努めたいと思っております。

何卒、会員の皆様各年次でクラス会等も行われると思いますが、その際は必ず「基金・年会費」を話題の一つに選んでいただきます。大きな輪に育てよう是非ご協力下さいますようお願いして、ご報告いたします。

「基金出資者ご芳名」

(平成八年八月二〇日現在)

田 藤 麻 横 室 酒 小 金 森 市 坂 新 小 井 名 沼 新 渡 八 十 足 平 塚 藤 三 細 長 田 永	(氏名)
辺 谷 野 山 伏 井 林 森 戸 岡 井 見 島 上 越 越 見 辺 谷 八 十 嵐 立 本 岡 玉 川 井 部 井	
良 博 惠 鶴 孝 久 末 裕 昭 四 昌 義 芳 隆 敦 達 義 武 義 三 耕 幸 富 謙 一 幸	
武 美 子 雄 一 幸 雄 雄 夫 象 彦 明 元 行 之 也 和 臣 登 郎 勇 司 三 薫 助 三 美 雄 岩	(年卒)
26 26 26 25 25 25 25 25 25 24 24 24 23 23 23 23 22 22 20 20 20 20 19 17 17 16 15 10 8	

本 田 新 井 守 江 八 岡 谷 黒 梅 森 宗 加 明 榮 近 兼 落 奥 石 木 藤 風 友 実 国 高 尾	(氏名)
間 畑 烟 上 長 角 谷 山 岡 田 木 沢 国 藤 賀 藤 利 合 平 飛 倉 高 田 広 兼 原 野 野 寿	
康 一 由 和 幹 英 弘 正 香 代 旨 哲 敏 正 卓 宏 博 圭 哲 喜 美 昭 美 子	
ます 三 夫 子 男 樹 佳 操 宏 子 進 英 治 馨 明 明 藏 造 子 力 一 明 生 寿 登 造 子	(年卒)
43 42 41 41 36 35 35 35 34 34 33 33 32 30 29 28 28 28 28 28 27 27 27 27 26 26	

●年会費についてのお願

東京格致会は、平成五年から年会費(年額二千円)をお願いしています。この年会費は、会報の発行、総会・役員会等の会合案内印刷費用及び郵送料、母校派遣者に対する旅費一部負担、その他経常的運営費用にあてられています。

特に会報の発行は、故郷情報を含め会員の皆さんが最も興味をもたれているだけに今後益々充実しなければならぬ課題です。そうした内容に支えられたい年会費ですが、現在七十余名の方々からご協力を頂いていますもの、これら経常的費用を充足してないため、本年度年会費をお支払いいただけない方は是非ともご協力をお願いいたします。

★年会費(二千円)振込先
郵便振替 〇〇一五〇一七二二九五〇
東京格致会

なお、総会出席者はその際総会費とは別にこの年会費を支払われても結構です。

(編集後記)

今回は、大先輩の方々に、大変ご無理なお願いを致しまして、会報四号を編集致しました。会員の皆様ご感想は如何でしょうか。編集者としては素晴らしい内容の会報が出来上がったと自負して居ります。是非、総会に出席していただいて、ご意見を賜わり次回の参考にさせていただきます。皆様、お返事を頂きます。

会員各位の親交を深める会報に発展させる為一人でも多くの皆様方からのたくさんの原稿をお寄せ頂く事を期待して居りますので何卒ご協力をお願い致します。(T)

「東京格致会会報」第四号

- 平成八年八月一日 発行
発行人 平田耕司
編集人 友広 寿
事務所 東京都千代田区神田淡路町二一三二二八
酒井会計事務所内
電話〇三三三二五五 八九九五
連絡所 東京都練馬区東大泉七二二二二八
友広 寿
(振込口座)
◎年会費 郵便振替 〇〇一五〇一七二二九五〇
東京格致会
◎基金 第一勧業銀行八丁堀支店
口座番号(普通預金)1068267
東京格致会 友広 寿